

内科医 つれづれ草

高山浩一

⑧

このところ何かと人工知能(AI)の話題がマスコミに取り上げられます。無人の車が自動運転で走ったり、将棋ソフトが名人に圧勝したり、まさにAI技術が世の中を変えようとしていることを実感します。第4次産業革命と呼ぶ人がいるのもうなすけず。

医工連携の重要性が叫ばれるようになって久しいですが、今や医学にとって工学は新たな診

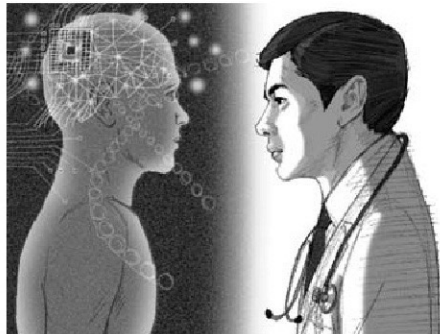
AI診断

断技術や治療法の開発に必要な可欠なパートナーです。手術支援ロボットはまさに工学の粋を集めた医療機器だと思えます。外科医の先生と話していると、ロボットは視野を拡大したり手ぶれを防止したり、人間の身体能力の衰えをカバーするさまざまな機能を備えているそうです。以前であれば視力の低下でやむなくメスを置くというところもあつたと思いますが、医療ロボットの登場で、外科医としての寿命も延びたといわれています。

どんなに精巧であっても機械にすぎなかつた医療機器が、今

人間の医師が必要

やAIによって自ら「診断」しようとしているのです。将棋ソフトとプロ棋士の勝負を見ても分かる通り、決められたルール



イラスト・山本重也

の中で答えを見つけるという作業では、人間は既にAIにかなわないことが明らかです。少々さびしいことながら、この現実を受け入れるよりほかにいと思えます。何といってもAIは電力さえ供給できれば、何時間でも休まずに働き続けることができるわけですからね。眠ったり食べたりしないと生きていけない人間の、生物としての限界を改めて感じてしまいません。

がん診療の領域でも、必要な情報を入力すればたちどころに最適な抗がん剤を提示するAIが開発されており、インドの病院では既に臨床の場で活用されているとも聞いています。今のところデータ入力に人間の力を借りているようですが、AI自身が電子カルテから必要な情報を集めてくる日も近いでしょう。

さて、AIによる自動診断が実現したとして皆さんはそれを受け入れることができるでしょうか。それは「自動運転の車に安心して乗れますか」の問いに近いものがあります。仮にAIが診断したとしても、それを分かりやすく、あるいは穏やかに患者さんに伝える人間の医師が必要だと私は信じています。近い将来、AIによる診断が社会に受け入れられた時、われわれ医師は自分の役割を改めて見つめ直すことになるでしょう。

(京都府立医科大学教授)